

# 家具づくりは文化である

飛騨産業株式会社 北海道工場相談役 東海林 貞雄  
URL <http://kitutuki.co.jp>



## はじめに

企業概要：本社・飛騨産業株式会社（岐阜県高山市漆垣内町3180）

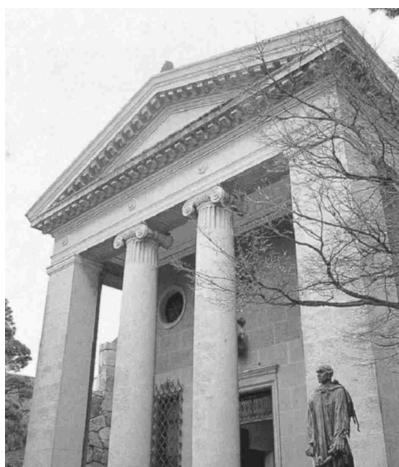
飛騨産業株式会社北海道工場（三笠市岡山194）

\*2009年クラレインテリア(株)より「北海道民芸家具」ブランドと北海道工場を飛騨産業(株)へ移行する。



## 北海道民芸家具のこだわり「民芸家具の思想」

民芸家具の思想は岡山県倉敷市にある、かの有名な大原美術館((株)クラレの創業者・大原孫三郎が創設)，倉敷民芸館など、日本の美術工芸の基礎と深い関わりがあります。



日本の歴史に於いては、焼物、織物、民具など生活に密着した素晴らしい工芸品がありました。その原点

は、民衆の生活のなかで使われていた『用の美』、すなわち「生活用具のなかにこそ本当の美しさがある」という考えでした。

しかし、戦後、とくに昭和30年代（1955年～）の生活向上に伴い物不足に陥り、その需要を満たすために粗製乱造となり、使い捨て商品が主力となって、今日に至っています。

生産性を高めるために合板を使い（例えばフラッシュ構造＝薄い合板を2枚使い芯材で厚さを作り出す方法），その合板の表面に木目印刷紙を貼った家具や、合板の上にエナメルを塗装した家具、合板に直接木目を印刷した家具が横行しました。

当然、価格も安く、その時に使えれば・・・的で、日頃の生活の安らぎや、うるおいが無くなり、文化的な生活から遠ざけました。

家具は丈夫な無垢材を使い、木材特有な木理や材色などを活かしきり、家具デザインを塗料塗装で活かす事が求められています。

当然、家具は「家族の一員、親から子へ、そして孫へ、家族の歴史を伝えていく」ものでなくてはならないと考えています。

北海道民芸家具は、民衆工芸の復興を通じて、日本人の心に伝統工芸への情景を取り戻そうとの思いから、北海道に会社を設立し、その歴史がはじまつたのです。

## 情熱を形に

民芸家具づくりへの大原父子の夢と情熱は、總一郎自らしたためた「我らの信条」として受け継がれ、いまもなお「北海道民芸家具」の制作に込められています。

## われらの信条

一、 よい工芸品は眞面目に生きるよい工人の集団

- によってのみ作られる。
- 一、よい工人は良心的な使い手の日々の用のため心をこめて製品を作る者である。
  - 一、よい工人は素材や機械や道具をも自分の身体の一部のように愛する者である。
  - 一、よい工人の腕は熱意と誠実と熟練とによって作り上げられる。
  - 一、工人の誇りと喜びは真心のこもった正しい製品を作ることにある。

創業者 初代社長 大原總一郎



### 北海道民芸家具への歩み

民芸家具は美術品や骨董品ではありません。「潤沢にあり、買いやすい価格であること」が必要です。

素材はその土地に多く有し、家具に合った丈夫な木材を使うことや、本物を手づくりだけで作ると高価となるため機械も併用し、手づくり感を残しながら本物の家具を追求しています。

柳宗悦氏、浜田庄司氏、バーナード・リーチ氏（英國）らが提唱された事を基にし、民芸の思想はいまなお「北海道民芸家具」に息づいています。



### 「北海道民芸家具」という文化

「北海道民芸家具」には、決して譲ることのできないこだわりがあります。ふつう家具メーカーのほとんどが、売らんがために、絶えずモデルチェンジを行っています。デザイン、素材、塗装色、仕様など使い手がいくら気に入っても、次に再び買い揃えることができるとは限りません。

また、作る側も椅子メーカー（脚物）と、リビング・ダイニングメーカー（箱物）など得意分野に分かれているため、統一されたデザインで買い揃えることができにくいのです。

残念ですが、日本の家庭では思想の統一された家具を揃えて置いている例が少なく、非常にさびしい思いがします。機能を重視したスチール製のオフィス家具が、堂々と家庭で使われて居る事など、潤いのある生活環境から大きくかけ離れています。

「北海道民芸家具」創業の歴史は1964年（昭和39年）から52年が経ち、現在に至っています。

現在、約250品種があり、リビング・ダイニング・書斎・生活小物まで全て制作しています。また、お客様の要望に合わせた特別注文家具をも含めて、全て受注生産で新鮮な商品をお届けしています。

会社設立から52年間、不变の素材・デザイン・仕様・北民家具色などを堅持していますので、最初に購入されて数年後に追加購入をして頂いても全く違和感が有りません。



### 木と人と民芸家具

「北海道民芸家具」は素材にこだわっています。その主材は、北海道の山岳地帯で標高1000m以上に育った、樹齢150年以上の岳樺（ダケカンバ）の木で、年輪が細かく繊細緻密です。材質は非常に堅く木理、木肌は誠に美しく最良の家具材で、作られた家具

も樹齢年数以上に使えるように、家具職人たちは「木に新たな生命を誕生させる」との強い想いで製作しています。



「北海道民芸家具」つくりに適した素材原木の選別、家具材としての挽き立て、素材検査されたものを約2年間「天然乾燥」し、さらに「人工乾燥」します。そして乾燥による木材の反りや、ひずみを除去するため、約1ヶ月「シーズニング」が行われ、ここまで工程は家具づくりの大切な基本となります。合板を主体とした家具とちがい、この工程を少しでも省くと家具の寿命は極端に短くなるのです。



乾燥工程を終えると木取り職人は、家具部材に適合した材面（板目・追柾目・柾目）を裁断して行くことによって、家具の木理の美しさや強度などが変わり、完成後の商品価値が生まれてきます。

木取り職人に要求されることは、木に対する目利き（製品の最終姿が見えること）、機械加工は精度や、木理の使い方など、製品組み立てでは、部材の接合強度技術、扉・引出仕込み合わせ精度調整などは品質基準を堅持する事などが有ります。塗装仕上げは、製品

価値に大きく影響を与えるので立体的なバランスの技術を要求されます。

これら夫々の職種職人が、衣装タンスや、椅子・テーブル、書斎まで、250品種を家具の特徴をもたせて絶対美に近づくように完成させます。

安定した製造と、安定した品質づくりには基本的マニュアルと深い習熟が必要となります。



### おわりに

良い家具というものは我々に心の豊かさや潤いある生活をもたらしてくれます。

そういう意味では家具づくりはひとつの文化だと思います。

「北海道民芸家具」が素材にこだわり、手づくり感にこだわり、何よりも“民芸”という思想にこだわり続けてきたのも、どこかに自分たちは文化の担い手であるという自負があったからに他なりません。

例えばその主材である樺の木は最低でも150年～200年以上経たないと立派な家具にはなりません。さらに家具職人たちの愛情と信念が、家具にそれ以上の寿命をもたらします。

親子二代にも三代にもわたって永く使い続けることのできる家具。こうしたところに文化というものは芽生えるのです。

\*東海林貞雄・75歳(1940.6.18生まれ)

略歴：現在、飛騨産業(株)相談役

1955年：青山洋家具・家具製作及び家具塗装の技術者（旭川市）

1970年：北海道民芸家具(株)入社 家具製造技術主任（千歳市）

1995年：クラレインテリア(株)取締役工場長兼開発担当（三笠市）

2004年：クラレインテリア(株)常務取締役生産担当責任者（三笠市）

2009年：飛騨産業(株)北海道工場工場長（三笠市）